

## ヒューム経済思想と富国の衰退

壽里 竜（関西大学・経済学部）

### はじめに

このフォーラムの課題は「初期啓蒙と経済思想」である。この課題をもとにヒューム思想を読み解く場合、二つの方法がある。一つは、両概念をそれぞれ定義してから始める方法であり、もう一つはヒュームの文明観から出発して、それと両概念とのかかわりを検討する方法である。今回の報告では後者の方法をとる。後者のほうが、両概念とヒューム思想とを強引にかかわらせることなく、両者の間にあるずれへと注意を向けるのに役立つと思われるからである。

本報告は三節に分かれている。第一節では、ヒュームの啓蒙観を、さしあたり「文明」観としてとらえ、ヒュームの著作や書簡からその内容を探る。第二節では、ヒュームの文明観をさらに明確にするため、近代社会に対するヒュームの評価と、彼の文明観との区別をおこなう。第三節では、富国 - 貧国論争を例に取りつつ、ヒュームを含めた当時の思想家の、富国の衰退に対する危機感の違いを検討し、経済学史的な論争である富国 - 貧国論争の背後に、各論者の文明観が深く関わっていることを明らかにする。最終的には、ヒューム思想を経済思想史という観点から分析する際に問われるべき点も指摘したい。

### 第一節：ヒュームの啓蒙観

近年の啓蒙思想研究は、啓蒙の定義がより多様であることを明らかにしてきた。そのことの当否はさしあたり措くとして、本報告では、その点を考慮しつつヒュームの啓蒙観から議論を始めることにする。

18 世紀の多くの思想家たちは、啓蒙という言葉がそれほど頻繁に用いていたわけではなかった。ヒュームについても事情は同じである。ヒュームのなかに啓蒙という概念にもっとも近いものを探すとすると、彼が「文明化された civilized」という形容詞で表現したものがそれにあたる。ただし、本報告で検討するのはあくまで一国単位の文明に議論限定する。この言葉の意味するところを明らかにするため、以下、二つの例を取り上げよう。

一つ目は、ヒュームが匿名で出版した小冊子、『元エジンバラ市長アーチボルド・スチュアート氏の態度と行動についての真の説明』である。1745 年のジャコバイトの乱に際して、ヒュームの友人でありエジンバラ市長であるアーチボルド・スチュアート卿が市の防衛を怠った罪で告発された。ヒュームは、市長を擁護するために匿名で短い小冊子を出版した。この小冊子が重要なのは、そこにヒュームの文明観、とりわけ文明と野蛮の構図がはっきりと見て取れるからである。もっとも発展の遅れたハイランドから大都市ロンドンのすぐ近くまで迫ってきた反乱軍の侵入は、ヒュームをふくむブリテンの思想家に、野蛮が遠い過去ではなく同一空間に存在するものであることを痛感させた。この小冊子で彼が描き出

しているのは、文明化した地域とそうでない地域との軍事技術の差ではない。「心の習慣」全般にわたる相違である。この心の習慣は、それぞれの人間が生れ落ちた環境、すなわち好戦的な生活様式や、技芸やマニファクチャに囲まれた生活様式などによって形成されてくる、とヒュームは指摘している\*。

二つ目は、ヒュームが古詩蒐集家で主教のトマス・パーシーにあてた手紙である。ヒュームは「私の考えでは、文明化されていない国民は統治、民事、軍事、宗教などの点だけでなく、道德面でも文明化された国民に劣っているのです」†と述べる。ここで、ヒュームが経済的な富を問題にしていないことに注目しておく必要がある。

啓蒙という概念には多様な定義がありうるが、すくなくともその概念は非啓蒙や野蛮という反対物があってはじめて成立するものである。以上二つの例も、ともに文明と非文明とが明確に対比された例である。これらの例に、ヒュームが主要著作である『政治論集』などで強調した考えを加えると、ヒュームの文明概念は、様々な文化的領域の総体である「生活様式(manners)」という単位でとらえられており、安定性と自由を両立させた国制と勤勉な生活様式によって実現する臣民の幸福こそが、ヒュームの理想とする文明のあり方だ、といえる。

それでは、この勤勉な生活様式（と国制）は人為的に創出することが可能なのか。ヒュームが主張するように、為政者が生活様式を維持し、ある程度は刺激することが可能だとしても、無から有を創出することはできない。国制に対する態度と同様に、人々の生活様式はたえず変動するものであり、基本的に自生的なものである。

生活様式を自生的なものとみなす、あるいは新たな生活様式を制度設計によって計画的に創出することはできないというヒュームの認識に、啓蒙概念の多様性を見ることができるとくにトゥルゴーに対してヒュームが書き送った手紙には、その違いが現れている。ヒュームいわく、「私はあなたが、人間の社会は完成へ向けてたえず進歩できるし、知識の増大がよき統治にとって好ましいものであることが今も証明されており、印刷術の発見のおかげで野蛮と無知の再来をもはや恐れる必要はないという、楽観的すぎるわけではないにせよ、心地よく殊勝な希望をもっている人々の一人であることを知っています。(略)しかし、人々はよりいっそう完全な状態へと達する一方で、富者は知識以外に満たすべき魅力的な欲望を数多く持ち、貧者は日々の労働と勤労で多忙なのです」‡。ここでの対立点は、人類の進歩に対する楽観・悲観ではない。知識の増大をつうじて人類の改善が可能になるか否か、なるとしたらそれはどのようにして可能か、という論点をめぐる見解の相違である。啓蒙思想家が一般に知識の増大を強調したこと、ヒュームもまた「勤労、知識、人間性」の連鎖を強調したことは知られている。『政治論集』でもヒュームは、軍事・民事両面にわたる技術や学芸などをめぐる知識の増大を描き出しているし、しばしば教育の作用についても論じている。だが、これだけ知識の普及を強調したにもかかわらず、ヒュームは

教育改革論を積極的に提示することはなかった。論説「完全な共和国についての一案」でも、ヒュームは理想的な国制を構想したが、人類の生活様式に大きな変更をもたらすような改革を批判し、またそれが可能とするユートピア的発想を厳しく諫めている。生活様式は人為的に操作・創出していけるものでないというヒュームの考えは、この教育制度論の欠如にもっとも端的に現れている。また、この点は、啓蒙思想という総称と、ヒュームの文明観とのずれを理解するうえでも重要な指標である。

## 第二節：文明社会と近代社会

つぎに、文明社会と近代社会とを区別してみよう。たしかにヒュームは、一部の論説では近代社会を商業により「臣民の幸福と国家の強大さ」とを両立させた社会とし、古代社会を「事物の自然な成り行き」に反した社会、すなわち国家の軍事的強大さのために個人を犠牲にした社会だと主張した。また、ヒュームが奢侈の効用を強調したという事実からも、ヒュームを近代商業社会の擁護者とする見方は当時から根強かった。しかし、ここでヒュームの考える文明社会のあり方と、近代の諸国家の現状とを区別すると、すくなくとも以下の三点について、彼は近代社会と文明社会との間に距離を見ていたといえる。

第一に、宗教上の対立である。ヒュームは近代社会において宗教上の対立がより激化したことを論説「党派論」で指摘している。「古代世界では哲学上のセクトが宗教上の党派よりも激烈だったが、近代社会では宗教上の党派が利害と野心からこれまでに生じたもっとも残虐な党派よりもすさまじく怒り狂っている」§。そして、哲学上の対立がもたらす危険より、宗教上の対立がもたらす危険のほうが、社会全体にとっては大きいとも指摘している。宗教論は、経済思想としては中心的な論点ではないが、ヒュームの文明観としては、上で見たように重要である。

第二に、公債による弊害である。商業論や奢侈論にくらべて、ヒュームの公債論はオーストリア継承戦争や七年戦争という当時の国際情勢とも深く関わっているため、時論的な性格が強いとみなされがちである。しかしヒュームは、近代と比べて古代社会の採った方策のほうが懸命である断言している。古代社会には平時に国庫に蓄積した財貨によって戦費を調達するが、近代社会は公債という方法を考案した。それは負債を安易に将来へと先送りするにすぎず、ひいては政府の存続そのものを危うくする。彼が近代社会における公債の危険性に対して示した危機感は、いまだ十分に評価されているとはいいがたい。

第三に、労働についてである。上に引用したトゥルゴー宛の手紙にも示されているように、ヒュームは（少ないながらも）過度な労働のもたらす弊害を指摘している\*\*。ヒュームが指摘するのは、分業による弊害ではなく、激しい労働による弊害であるため、この点は厳密に言えばかならずしも近代固有というわけではない。だが、論説「技芸の洗練について」でヒュームが示した理想的な勤労のあり方（活動と快楽と安逸の均衡）と、現実の

労働のあり方とのギャップを示す点としては重要である。

こうして(ヒュームの考えた)文明化と、彼が見ていた近代社会の現実とを区別すると、ヒュームが近代社会の利点として認めた部分が、彼の考える文明像の全体ではないことが明らかとなる。近代社会が人間の自然なあり方に即しているという主張や、勤労や奢侈の効用を強調する議論は、これまでヒュームの経済思想史の文脈で詳しく論じられてきたものだと言える。その一方で、公債、(分業ではなく)労働のもたらす弊害はあまり注目されてこなかった。古代・近代という対比で見ても、奢侈の利点を生かした社会という点では近代に、公債の弊害なき社会という点では古代社会にヒュームは軍配を上げている。このことから明らかなように、ヒュームの古代・近代社会に対する評価は複雑である。したがって、ヒュームが評価した現実の近代社会の利点だけが、ヒュームの考える文明化ではないということに注意すべきである。また、これまでヒュームの経済思想として注目されてきた点は、後者のほうに偏っていたといえる。

### 第三節：富と文明

第一節ではヒュームにとっての啓蒙観を文明観に置きなおして考察し、第二節ではヒュームの考える文明観と近代社会の現実とのずれを指摘してきた。第三節では、富国 - 貧国論争をつうじて、ヒュームが考えた富国と、これまでみてきた文明国とのかかわりを考察することで、啓蒙と経済認識という課題を果たしたい。

ヒュームとタッカー(あるいはオズワルド)の間からはじまった「富国 - 貧国論争」は、ホントが指摘するところによると、「誤解による喜劇」であった。要は、富国の貿易全般が衰退するのではなく労働集約的な生産物を貧国に譲るだけであることをヒュームが十分に説明しなかったために、あたかも富国は必然的に衰退して貧国に追い抜かれるとの誤解を与えたのだ、とホントは整理をした<sup>††</sup>。

ヒュームとタッカーの間に理論的にはそれほど大きな違いがなかったとしても、それではなぜそういう誤解が両者の間に生じたのが重要である。タッカーとヒュームとの最大の相違点は、経済理論の背後にある非理論的な確信にあった。タッカーは、ヒュームが用いた生命体の比喻(いかなる社会や国にも寿命があり、いずれは老年期、そして死を迎えるという考え)を批判して、神から与えられた資源を濫用しなければ富国の永続的な発展は可能であり、またそうなるべく神によって定められていると主張した<sup>††</sup>。

他方、いかなる国もいずれは衰退を迎えるというヒュームの確信は、彼の文明観の基調をなしている。現実認識としては、彼はローマ帝国を例にとり、拡張しすぎた帝国は必然的に崩壊すると主張した。これは、歴史から教訓を得た現実認識である。それでは理想的な国制であれば、どうか。論説「完全な共和国についての一案」において、ヒュームは死すべき人間の作った制度が不死であるはずがない、と論じて議論を締めくくっている。つ

まり、いずれにせよ文明化した国は衰退するのであり、問題はその着地点をどこに求めるか、ということしか残されていない。

このような発想は、人類の歴史が始まって以来、人間は墮落・衰退の道を進み続けているという主張や、経済的に豊かになると徳の衰退により国が滅びるという発想とは異なっている。だが、タッカーのように、適切な方策を採れば無限の発展が可能だと考える人たちにとっては、十分に悲観的な議論と写ってしまう。ヒュームは、富国が遠い将来において、仮に多くの生産物に関して貿易上の優位を失ったとしても（彼の議論ではそうなる）、そのことをもって必然的に非文明に陥るとは考えていない。国制についても同様の考えをヒュームは示しており、論説「ブリテンは共和政と絶対君主政のいずれにより近づいているか」では、ブリテンが絶対君主政になることを「安楽死」と称していた。この主張も、ブリテンの栄光の不滅を信じる人には、十分に悲観的に聞こえる議論である。

それ以外にも、ヒュームの議論の中には、一国の文明の盛衰を示唆する議論がある。論説「技芸と学問の興隆と進歩について」において、ヒュームは「技芸とは、いかなる国においても一度完成の域に達すると、その瞬間から自然と、ないし必然的に衰退し、めったに、ないし決してそれらが以前栄えた国で復活することはない」§§と述べている。こうした主張は、マキャヴェリと結び付けられて、強調あるいは批判されてきた。ただし、ヒュームの主眼は、この論説では一貫して「高貴な競争」の維持に向けられていたのであって、そう考えると、競争関係の活性化による勤労の維持という点では、『政治論集』における自由貿易の主張となんら矛盾するものではないのである。

## 結論

スコットランド啓蒙思想の研究において近年用いられてきた「富と徳」という問題視覚は、このフォーラムの課題である「初期啓蒙と経済思想」とも重なっている。ただし、この「富と徳」という問題設定は、富による繁栄を単一の価値基準とする考えが、すでにその当時の思想家に妥当可能であることを前提にしている。かりにヒュームが、富と徳をトレード・オフの関係でとらえる思考から富と徳の両立する思考へと大きな一歩を踏み出したとしよう。その上で、そのこととは別の次元で、ヒュームの中になお一国の衰退という論点が残ったとしても、そこにはなんら論理的矛盾はない。ヒュームが示した衰退のビジョンを、彼の文明社会観を損なうものとしてではなく、むしろその本質と捉えることもできる。そうであれば、近代化の路線を富と徳の両立ととらえるにせよ富の増大としてのみ捉えるにせよ、それらはヒュームの文明観とのずれを生じてしまう。ここから明らかになるのは、永続的な知的進歩や経済的発展への信頼という意味での近代化が啓蒙と経済学それぞれの定義に含まれるほど、それだけヒュームの文明の定義とずれる領域も増える、ということである。そして、今後問われるべき問題は、啓蒙と経済学が近代化という点でど

の程度「結託」しているか、そのつながりがどの程度まで必然的・論理的であるか、ということである。

---

\* David Hume, *A True Account of the Behaviour and Conduct of Archibald Stewart, Esq; Late Lord Provost of Edinburgh, In a Letter to a Friend*, London, 1748, rep. in M. A. Box, David Harvey, and Michael Silverthorne, 'A Diplomatic Transcription of Hume's 'volunteer pamphlet' for Archibald Stewart: Political Whigs, Religious Whigs, and Jacobites', *Hume Studies* 29 (2003) 223-65.

† *The New Letters of David Hume*, Garland Pub., Raymond Klibansky & Ernest C. Mossner eds., 1983, p. 197; 1773 年 1 月 16 日。

‡ *The Letters of David Hume*, J. Y. T. Greig ed., 2vols., Clarendon Press, 1932., II: 180; 1768 年 6 月 16 日。

§ David Hume, *Essays, Moral, Political, and Literary*, Eugene F. Miller ed., Liberty Classics, 1987, p. 63

\*\* 「安逸と暇ほど愛の情念を刺激するものはなく、勤労や激しい労働ほどそれを破壊するものはない」(論説「国民性について」*Essays*, p. 213)。

†† Istvan Hont, 'The 'Rich Country-Poor Country' Debate in Scottish Classical Political Economy' in Hont and Ignatieff ed., *Wealth and Virtue: The Shaping of Political Economy in the Scottish Enlightenment*, Cambridge U. P., 1983.

‡‡ Josiah Tucker, *Four Tracts together with Two Sermons on Political and Commercial Subjects*, in *The Collected works of Josiah Tucker*, Routledge/Thoemmes Press, 6vols., 1993, Vol. 2. とくに Sermon II を見よ。

§§ Hume, *Essays*, p. 135.